戸川幸夫動物文学全集 5

講談社

戸川幸夫動物文学全集5　牙王物語ほか
昭和五十一年九月十八日　第一刷
昭和五十二年二月二十四日　第二刷
著者　戸川幸夫
装幀者　辻村益朗
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目十二番二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五一一一一(大代表)　振替東京八一
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
©戸川幸夫　一九七六年　Printed in Japan

定価は外箱に表示してあります　(文2)

目次

牙王物語　5
少年と虎　241
鎖の村　286
少年とオリックス
山犬塚　308
白い夜の下で　321
猫物語　265
加奈のマングース　335
解説・尾崎秀樹　346

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

牙王物語

自由を求めて

そのむかし、北海道一帯に栄えていたアイヌ人たちは、彼らが住む大陸の中央に変わることなく雪を冠り、雲表に輝く神々しい山岳のあることを知り、崇めて「ヌタクカムウシュッペ」と呼んだ。それは「沼や川多き神々の住める高原」という意味であった。

弓と矢をたずさえて、原始林の奥深く分け入った彼らは白雲の去来する山頂に神秘な湖沼や、この世のものとも思えぬ美しい花々の咲き匂う別天地を見いだして、

「これは神の国にちがいない。山の神々の在す場所だ！」

と、汚れ多い身で神の御座近くに入り込んだ過ちを怖れ、大地にひざまずいて敬虔な祈りを捧げたのだった。

この山こそ、今日北海道の大屋根といわれる大雪山連峰である。

大雪山——何と雄大な呼び名であろうか。山は山を呼び、相集まり、相援けて見はるかす限り怒濤の押し寄せる様にも似ていた。石狩、十勝の両国にまたがり、北海道の中央高地約二十三万ヘクタール（神奈川県ほどの広さ）を占める山岳地帯が、この日本一の国立公園なのだ。

大雪山——それは一つの峰に贈られた名ではない。北海道の最高峰、二二九〇メートルの円錐火山旭岳を中心とする大雪火山群と、二一四一メートルのトムラウシ山、二〇七七メートルの十勝岳を中心とする十勝火山群、これと全く地質、成因を異にする水成岩の石狩連峰、碧玉のごとき然別湖のふもとの原生林に抱く然別鐘状火山群によって囲まれた城郭のような区域の総称であった。そしてこれら山岳地帯の雪渓から迸り出た氷水は北西に流れて北海道一の大河石狩となり、南に落ちて十勝川となり、音更川となり、西に走って忠別、美瑛の両川、東に去って留辺蘂川となる。

山々には這松、蝦夷松、椴松、蝦夷板屋、岳樺、白樺、山毛欅、白楊などの千古斧鉞を入れない寒地性の原生林が鬱蒼と繁茂して、陽の光を遮っていた。第四紀洪積世に始まった激しい火山活動で、何度もくり返した噴火と、その度に火口から流れ出る熔岩流や泥流、火山噴出物とによってとげとげした険しい山襞が形作られ、目も眩む断崖絶壁が至る所に出現していたが、今日、山の頂に立って眺めると、その山容も分らぬほどの大樹海が地の果まで続いていた。

そして日本一のこの原生林は大部分が人跡未踏であるため、羆をはじめ北狐、蝦夷鹿、蝦夷鼬、蝦夷貂、蝦夷野兎、

鳴兎、縞栗鼠や大鷲、熊鷹、鷲木兎、鷹、蝦夷雷鳥、星鴉など野生の鳥獣の自由で平和な楽天地となっていた。雪渓を割ってほとばしり出た石狩、十勝の源流は、この大密林の中を潜っては隠れ、露われては走る間に瀑布、渓流を併せて次第にその勢力を増し、やがては安山岩や流紋岩、凝灰岩によって生成された山腹を穿ち、岩壁を削って層雲峡(石狩川)、天人峡(十勝川)の景勝を作り出した。

もう春であった。大雪の峰々は、まだ白い雪の砦を固く鎖して開こうとはしなかったが、春は里から上ってきた。層雲峡への入口に当る上川の町の外れから、この辺りには珍しい華やかな楽隊の響きが伝わって、それが春を呼ぶかのように浮き浮きとした気分に人々の心を駆りたてた。娯楽に飢えている上川町や近郷の人たちは、楽の音に誘われて、ぞろぞろと集まっていった。それは何年目かに一度、町外れに小屋がけをするサーカスがまたやって来たのだった。一頭のインド象が、もの珍しげな見物人たちにさかんにご愛嬌をふりまいていた。

「東京サーカス」と銘うったこの一座は、型通りではあったが、空中ブランコや玉乗り、自転車曲芸、綱渡り、裸馬の曲乗り、手品、空中ダンスなど多彩な番組を組んで客を喜ばせた。象のトンちゃんのトーダンスや日本月の輪熊の花子の自転車乗りも人気を呼んだが、一番の呼びものはライオンのネロと格闘をするヨーロッパ狼のレッド・デヴィルの芸であった。ヨーロッパ狼は、世界の狼族の中でも最も大きく、立派で、堂々としている種類だが、レッド・デヴィルはそのヨーロッパ狼の中でも最も大型といわれるビレネー地方の産だったので雌ではあったが、セパードの大きな雄よりも遙かに巨大であった。しかし、それは肩の高さや鼻の先から尻尾の先までの長さについていえることであって、体重はセパードの半分もなかった。きりりとひき緊った四肢、切れこんだ腹、このことはデヴィルがセパードに比べていかに身軽に振舞えるかということを示していた。事実、彼女はライオンのネロと一つの檻の中に入れられ、傴僂の猛獣訓練士の、

「ただ今からライオンとヨーロッパ狼のレスリング大試合を行いまあーす」

の口上で戦わせられる時に立派に証拠だてた。犬ならば到底、跳ね上がれない高さにまで、デヴィルは飛び上がり、しかも空中で、必要とあれば、くるりと宙返りや反転をして攻撃を中止したり、方向転換をすることが出来た。だからネロとの闘争は——それは馴れ合った二匹の野獣の戯れに過ぎないとしても——伯仲していて、見物客の手に汗をにぎらせるに十分だった。百獣の王ライオンより強いものはない、と信じこんでいた見物客はショウが終わるとようやく我に還り、

「ヨーロッパ狼ちゃ、すごい猛獣だなア」と、いまさらのように堂々と引き揚げてゆくレッド・デヴィルのうしろ姿に、より多くの賞讃を送るのであった。

レッド・デヴィル――〝赤い悪魔〟というこのニックネームは、彼女が戦いの最中に白い牙の間から見せる真っ赤な舌と血ばしった好戦的な眼に対して贈られたものであった。その夜、レッド・デヴィルはくたくたに疲れていた。ちょうど日曜に当たっていたので、東京サーカスとしてはかき入れ時であって、デヴィルはいつもより三回も多く、ショウをやらされたからであった。それだけにその晩は、ふきげんであった。最近傴僂の猛獣師が助手として傭い入れた飼育係りの峰公という若僧は扱い方について全く無智なくせに、こすっからくて、彼らの餌代をごまかして、少しずつ肉を削っていたからだった。この前までいた飼育係りの爺さんは、よく面倒を見てくれて、日曜や祭日の夜は、必ず、

「今日はご苦労だったな」と、レッド・デヴィルの頭をやさしく撫でて、いつもの餌のもらい分におまけをしてくれたから、レッド・デヴィルは、この爺さんが好きだった。だが、その爺さんが函館の興行の時に卒中で急に倒れてしまって、今の峰公が爺さんに代って来た。

レッド・デヴィルは峰公が大きらいだった。どんなに上手にショウをやって、座長のマキ親方からほめられた時でも、峰公は仏頂面で、「ほれ、さっさと入れ」と、蹴込むように犬小屋に追い込むからだ。

レッド・デヴィルは身体の大きなヨーロッパ狼ではあったが、まだ小さいうちにこのサーカスに買われてきて、一座の犬たちと一緒に育てられた。だから、レッド・デヴィル自身は狼でなく、犬だと思いこんでいた。彼女は人にもよく馴れ、犬にも――それは一座の犬たちのことだが――親しくしていた。ところが、このごろは時々、妙な血の騒ぎを覚え始めていた。それはどこか遠くから彼女を呼ぶ声だった。その声はデヴィルの鋭敏な耳の鼓膜を、直接に揺り動かすものではなかったが、心のどこかに響いてくる、どうにもならない呼び声であった。強いて言えば野性が呼ぶ、狼の血の叫びだった。昼間、柵の中でライオンのネロと格闘している時も、レッド・デヴィルは時々あの呼び声を感じる。その時はネロでさえ、はっとするほど、猛烈にデヴィルは暴れた。ネロはまだ少年期から成年期になりかけの若ライオンで、ふざけるのが好きだった。レッド・デヴィルも、ついこの間まではネロと同じような気持ちでいたが、この頃ではそれももう興味を失いかけていた。デヴィルはもっと本能的な何かを求めていた。

そこへ今夜は食糧も少なかったので怒りっぽくなっていた。同じ箱に入れられているセパードのエレンが親し味を見せにのそのそと、傍にやってきた時も、デヴィルは怒っていたので、いきなりエレンの首筋に牙を立てた。

「ギャ　ギャーン、キャン　キャン……」

エレンは、咬みついた当のデヴィルでさえ、驚くほどの大きな泣き声をたてて、小屋のすみに縮こまった。

〝うるさい〟という程度にしか咬んでいないつもりであっ

たが、ヨーロッパ狼としての強い顎の力と鋭くて長い牙が、思いがけないほどの傷をエレンに与えていた。峰公が走ってきた。峰公は血をたらしているエレンを見て、すぐに犯人がレッド・デヴィルの奴だ、ということを悟った。

「この野郎！」

峰公は、長い鉄の棒を柵の間から差し込んで、デヴィルの身体を突こうとした。だが、身の軽いデヴィルが、峰公なんかにやすやすと突かれるはずもなく、かえって同室のコリーまがいのエス公やポインターのボケの身体をこね回してキャンキャンという騒ぎを一層大きくした。

「どうしたんだい、一体……」マキ親方が、ぼりぼりと頭をかきながら酔っぱらった顔で出てきた。

「へい、デヴィルの奴が、エレンを咬みましたんでね」

「デヴィルが……？　おとなしい奴だがな」

親方はそう言うと、犬小屋に近よった。マキ親方はレッド・デヴィルの入っている犬舎に顔を寄せて、

「おいデヴィ公、どうしたい。何を怒ってるんだい」

と声をかけた。デヴィルは興奮はしていたが、マキ親方に対しては好意を持っていた。

「おい」

とマキ親方は峰公をふり返って、

「猛獣師の大将はどうしたい？」と訊いた。

「へえ、さっき出かけました」

「またか……」

マキ親方は舌うちをした。傴僂の猛獣師は毎晩飲みにゆく癖があった。

「飲むのもいいがちゃんと始末してからにしてくんなくちゃあ……」

マキ親方はぶつぶつと口の中で叱言を言ってから、

「もう春だな。デヴィ公が神経質に興奮するシーズンになってきてるんだ。お前はまだ来たてだから分らねえだろうが、デヴィ公は毎年春になるとこうなんだから、外の犬と分けなくっちゃいけねえ」

「交尾期なんで……親方？」と峰公はお愛想に聞いた。

「そうかも知れねえ。狼の交尾期は冬だということで、春はむしろ出産期の筈だが、こいつあ人間に飼われてる故かいつも遅れやがんだ。どうも気が立つようだから……そうだ、月の輪熊の檻が一つ空いてたな。あれに移して少しゆっくりさせてやれ。怒らしちゃ駄目だぞ」

そう言い残すと、自分の部屋に戻っていった。その後ろ姿が消えると峰公は、

「やい、手前が暴れやがるから仕事が増えちまったじゃねえか……」

と不平を言いながら、熊の檻の扉を開いてレッド・デヴィルを移し替えようとした。デヴィルはそれまで人間に反抗したことは一度もなかった。だからサーカスの一座の者は狼だとはいっても、おとなしい奴だと思いこんでいた。しかも余りにセパードに似ていたので、動物をよく知

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

らない峰公はデヴィルをセバードと同じに考えていた。

犬舎の扉を開けて、「やい、さっさと這入れ」と、峰公がデヴィルを引き出そうとした時、デヴィルには狂暴な怒りがこみ上げてきた。おとなしくともデヴィルはもともと獰猛なヨーロッパ狼である。怒りはすなわち行動であった。デヴィルはネロと戦う時のように素早く、しかし友好的ではなく憎悪をもって、跳ね上がり、峰公の頬から頤にかけてずばりと引き裂いた。

「ぎゃあっ、こん畜生ッ！」

と峰公は右手でふり払おうとして、次の瞬間右腕にデヴィルの鋭い牙を埋められ、引き倒された。峰公の凄じい悲鳴に、サーカスの人たちが、飛び出してくる足音を聞くとレッド・デヴィルに野生獣の本能が戻ってきた。〝追われている〟という恐怖が稲妻のように彼女の五体を撃った。首筋から肩にかけての針毛が、そして尾のつけねの毛が、さあっと逆立った。犬舎のところへ駆けつけた人々は、ちらッと闇の中に飛んだふかふかとした尾の尖端と、血だらけになって呻いている峰公を見ただけだった。

レッド・デヴィルは後ろの方で人間たちの騒ぐ声を聞くとひたむきに走った。彼女のこれまでの歴史の上では人間は神であり、支配者であった。生命の保護をしてくれた代わりに、絶対に手向かってはならないタブーを押しつけたものであった。その掟を彼女は今夜、犯してしまったのだ。峰公がたとえどんな奴にしろ、ともかく彼女は人間を傷つけたのである。人間と獣との紛争の場合、正当な理由が獣の側にあったとしても、勝ち目は絶対に人間の側にあった。人を傷つけた獣は〝傷つけた〟というその事実だけで、すべての正当な理由は帳消しにされて生命を失わなければならない。デヴィルは、漠然とではあったが、野獣の本能でそれを予感した。犯してならないことを犯した恐ろしさが襲ってきて（今まで威張っていた人間が、実際にやっつけてみると如何にたわいのない、ネロよりも、いやセバードのエレンよりも下らない相手であるかが分ったが）デヴィルは逃げた。尾を下げた、軽い足どりの、辷るような狼流の走り方で、彼女は走り続けた。たった一度、彼女の敏感な耳は、はるか後ろでマキ親方が自分を呼ぶ声を捉えてちょっと立ち止まって、振り返った。が、その声にもまして、彼女を呼ぶ本能の呼び声の方が強かった。ピレネーの森林で、仔狼の時代に捕えられたデヴィルは、自然の山や森や川や雲や霧をあまり知らない。だが、何ともいえない強い引力で山や森が彼女を呼んでいる。〝さあ自由になったんだ。早く戻ってこい！〟という野性の呼び声が彼女の心を疼かせた。デヴィルは影のように音もなくまた走った。

道は緩かではあったが、ずっと上りになっていた。デヴィルは彼女の本能の導きに従って、山へ、山へと走った。道に沿って淙々という水音が響いてきた。石狩川の流れであった。河口では白雲を浮かべて海のごとき雄大な姿

を見せる石狩川も、この辺では川幅も狭く、流れも急であった。水は岩に裂かれ、また岩を削り、岩を割って奔流していた。

月はなかったが、晴れていて、星が降るようだった。万年雪をいただいた黒岳、桂月岳、凌雲岳、北鎮岳が、雪があるために夜空にもくっきりと聳えて見え、風が氷のように冷たかった。しばらく行くと人家の灯が点々と見えた。層雲峡温泉の灯であった。レッド・デヴィルは今夜は人家に近づくのを恐れた。彼女はちょっと迷った後、できるだけ早くそこを通過することにした。

町の犬が、その大部分は勇猛なアイヌ犬の血が交っていたが、他所者の犬、しかも彼らの仲間では持ち合わせていない妙な臭い——狼の臭い——を持つ怪しい奴だ、というので猛烈に吠えついてきたが、デヴィルは問題にしなかった。こんな奴らを撒いてしまうのはデヴィルにとっては造作もないことであった。それほど彼女の足は段違いに速かった。椴松や蝦夷松林の暗黒の中にひょいと飛び込んで、ふり放せば何でもなかった。そこを越えると眼も眩むほどの絶壁が延々と続いていた。それは太古の時代に、十勝岳から噴出した流紋岩や凝灰岩の熔岩流によって形成された柱状節理の断崖であった。その崖からは流星、銀河、錦糸などと名づけられた飛瀑が轟々と落ちかかっていた。

デヴィルは、やや咽喉が渇いた。そこで銀河の滝壺近くに寄って、前肢を縮め、ぴちゃぴちゃと音を立てて水を飲んだ。痺れるような冷たさが気持ちよかった。ふと他の獣の気配を身近に感じて、デヴィルはさっと飛び退いた。彼女のすぐ側に、彼女と同じくらいの大きさの耳の立った犬が佇んでいた。その犬は他の犬のようにデヴィルに敵愾心を見せなかった。友好的に尾を振っていたが、そろそろと用心しながら寄ってきた。二匹は鼻をつき合わせ、互いに相手の周囲をぐるぐると廻りそして親し気になり、やがて並んで山に走った。

魂の芽生え

夏がきた。一年中で最も明るい六月の空が、この広大な大雪山連峰の鬱蒼と茂った原生林の上にもひろがっていて、川辺に水を飲みにくる羆や、蝦夷鹿や、その他の野生獣たちに微笑みかけていた。石狩岳や、トムラウシ山や、旭岳の頂からは、真夏の先ぶれである積乱雲が油然と湧き上がり始めていたが、しかし夏はここよりもずっと下界の上川や旭川の町か、あるいは遙かに高い大空のものであった。旭川市や上川町では人々は額に汗を浮かべて歩き廻り、働いていた。そして青空には、ぎらぎらと輝く入道雲と、その雲の峰を灼きつける太陽があったからだ。だが、ここ石狩川の上流、ホロカイシカリ川の奥では光も、空気も、風もまだ夏のものではなかった。

ためらいがちな大森林の息づかいと、ゆらゆらと川岸に

燃えあがる陽炎と、岩の裂け目から顔を出している可憐な野花とが、遅い春を告げていた。その岩のすぐ上の真っ暗い針葉樹林の中から、川の中ほどに向かって倒れ込んでいる大木があった。根元の差し渡しが二メートルほどもあろうかと思われる椴松の古木で、数世紀の樹齢を重ねているに違いない。落雷に撃たれたのか、嵐にやられたのか、あるいは寿命がつきて自然に倒れたのでもあろうか。周囲の蝦夷松、椴松、岳樺の林を押し広げるように倒れ込んでいた。もうだいぶ昔に倒れたと見え、ぼくぼくに腐り、蘚苔が覆っていて、そこからは新しい樹木の生命が背のびをするように伸びはじめていた。自然更新であった。古いものが場所を譲り、新しいものが取って代わる——これが大自然の法則なのだ。この大木が倒れたため、押し広げられたその付近だけは太陽の光が訪れ、生き生きとした新しい生命の律動が見られた。そして何よりも、それを証拠だてるのは、その倒木と岩とで保護された洞窟の中に蠢くもの——レッド・デヴィルの一家があることだった。

いま私はデヴィル一家と呼んだ。たしかに一家族であった。デヴィルと、彼女が、つい二、三日前に産んだ小ッちゃな、ぶかっこうな五匹の赤ン坊たちである。デヴィルは、この洞窟を捜しだす頃から、非常に警戒ぶかくなっていたが、いよいよ赤ン坊たちを産むという段になると、針のように神経を尖らせた。赤ン坊たちがうす暗い洞窟の中で一匹ずつ生まれてくるのを、デヴィルは柔らかい、暖かい舌でぴちゃぴちゃと舐めた。赤ン坊たちは生まれたばかりなので、汚れて、ぐっしょりと濡れていた。それをなんどもなんども舐めかえして、綺麗にすると、ふかふかとしたお腹の毛で包んでやった。赤ン坊狼は、一匹が綺麗に仕上がると、次の奴が生まれてきた。そしてデヴィルはなん時間もかかって母親としての、その困難な役目を果すと、赤ン坊たちを抱いたまま穴の中でじっとしていた。洞窟の外を、風が渡り、かさという木の葉の音をたてても、デヴィルの肩毛は逆立って、残忍なうなり声が、自然に彼女の唇から洩れた。

一日目は母狼はまったく穴から出ようとしなかった。二日目、デヴィルは激しい渇きを覚えた。そこで用心をしながら、そっと洞窟の入口に這い出てみた。穴は倒れた大木の下に開いていて、岩の陰にあった。そしてその辺りには、蝦夷根曲笹と羊歯とが覆っていて、ちょっと外から見ても分らないようになっていた。デヴィルは、そろりと外に出た。ふっと獣を感じ、彼女は白い牙を出して威嚇した。彼女に怒鳴られた相手は、彼女がこの洞窟を発見して、入り込む時の協力者である、あの滝壺の犬であった。彼は、いまは彼の妻であり、そして彼の五匹の赤ン坊の母親であるデヴィルに、蝦夷雷鳥を土産に持ってきたところだった。その犬は、黒褐色の毛皮の、耳の立った大きな奴だった。尾はふさふさしていてデヴィルの尾に似ていたが、違うところは、はっきりとではないが腰の上に巻き上

がっていることだった。彼はアイヌ犬と樺太犬との混血児で、激しい猟犬の気質を母のアイヌ犬から、そしてがっしりとした、逞しい体格を父の樺太犬から受けついでいた。彼は、このホロカイシカリ川のずっと下流の、石狩川が、支流であるニセイチャロマップ川との合流点、大函という所にいるアイヌの猟師、本間カネトの飼い犬のテツだった。

テツはカネトに連れられて大雪山に羆を追い、鹿を追った。春になって狩猟期が終わると、カネトは鉄砲を置き、登山者や観光客相手に熊彫りなどを作って売ったから、テツはカネトの一人息子のヨシトについて山に登った。ヨシトは中学を去年卒業していた。雪が消えると彼は父の手伝いをして、父の彫り上げた彫刻や、罐に詰めたアイスクリームを、黒岳小屋まで運び上げて登山客に売っていた。テツは山が好きだった。だからカネトが山に這入らない季節には大ていヨシトに従った。飼い犬とはいえ、テツは普段は山に野放しにされていた猟犬であった。だから、彼は勝手に野兎を押さえたり、雷鳥を捕えたりした。おそらく、そういった半野生の臭いがテツの身体に滲みこんでいたに違いない。

狼は犬とはめったに混血しない。しかし、そういう例がないわけではない。幼年期から一緒にして育てられた犬と狼の間ではまれに混血児が生まれることがある。この場合がそれであった。レッド・デヴィルは純粋なヨーロッパ狼ではあったが、幼少の時から犬と共に育てられ犬に馴れていたし、テツは野性の臭いを持っていた。野性の呼び声に惹かれていたデヴィルが、テツに鼻をつき合わせた瞬間に、仲良くなれる相手だと見てとったのは、そういう点であった。デヴィルは五匹の赤ン坊たちを産む頃から怒りっぽく、疑いぶかく、警戒心が強くなっていた。それが赤ン坊が生まれてみると一層激しくなって、父親のテツですら、洞窟には近寄せようとしなかった。テツはそれを知っていたので、啣えてきた蝦夷雷鳥を地面にそっと置くと、やや離れた川岸に腰をおろして、デヴィルの様子を見守った。デヴィルは、立ち止まり、ちょっと肩をそびやかしてテツを眺め、それから流れに吻をつけてぴちゃぴちゃと音をたてて水を舌で掬った。デヴィルは昨日から一滴の水も咽喉を通していなかったので、ずい分、長く飲んだ。お腹も空いていた。テツが運んでくれた肥った蝦夷雷鳥の旨そうな匂いが、ぷんぷんと鼻腔を刺激したが、洞窟の中で、ミイミイと鳴く赤ン坊どもの声を耳にすると、ご馳走はそっちのけで、背毛を立てて、穴の中に走り込んだ。

五匹の仔狼たちは、まだ目が開かなくて、弱々しかった。デヴィルは赤ン坊たちの傍にどさりと横たわると、温かい舌で一匹ずつ、赤ン坊をひっくり返して、お腹を舐めて、清潔にしてやった。赤ン坊たちは自分こそ母親の乳房の一番いいやつを捉えようと大騒ぎをした。五匹のうち三匹は雄で、二匹が雌だった。そして雄の三匹のうちに一匹

だけ飛び抜けて大きい赤ン坊がいた。恐らく、その赤ン坊が最初に生まれてきたに違いない。何となれば犬や狼のように一度にたくさん産む獣の赤ン坊は、大きいものから順々にこの世に送り出されてくるからだ。だが、それにしても、この赤ン坊は、まるっきり大きくて、一番お終いに生まれた雌の二倍近くもあった。だから元気がよくて、ほかの弟妹を押し退けて、いつも一番いい場所を占めた。それでその子はますます栄養に恵まれ、ぐんぐんとほかの四匹とのひらきをつけていった。

父親のテツはデヴィルが洞窟の中で、まだ小さい赤ン坊たちに授乳をしている間中、せっせと蝦夷野兎や野鼠を運んできた。山の中を自由に歩きまわる生活をしているとはいえ、飼い犬であるテツは二日に一ぺんか、三日に一度は大函の主人の家に帰っていった。そしてまたデヴィルのところへ、こっそりと戻ってきた。日が経つにつれデヴィルは以前ほど、テツを警戒しなくなった。洞窟の中のわが子との対面はまだ許さなかったが、倒木の下の洞窟の入口の近くまで、獲物を運んでくることには抗議しなかった。そしてデヴィルは、テツが咥えてきた獲物を狼式の鵜呑みで、ろくに噛まずにまたたく間に平らげた。丈夫な彼女の胃の腑が、噛み砕かれない物でもたちまちに、消化してしまうのであった。野性の生活では味わって食べるということなどは愚の骨頂だ。いかに速く、確実に胃の中に詰めこむか、であった。速ければ速いほど、それだけひとより余計に取り込むことが出来るし、そうすることが他よりも強大になることであった。それが野性の掟であった。力は正義なのだ。他人の獲物を腕力で、あるいは狡智で奪ったとしてもそれは野性の法律では「正しいこと」なのであった。

赤ン坊たちは、目の見えないうちからこの法律を学んだ。彼らは争って母親の乳房を求めた。ここにも〝公平〟という言葉はなかった。力の強い奴、身体の大きい奴、狡い奴が、常に勝った。デヴィルは彼女のお腹をぐーん、ぐーんと両足で突っぱって、ごくりごくりと乳を飲んでいる小っちゃいもの達を舐め回しながら、遠い昔を想い出していた。記憶というには、余りにもぼんやりとしたものだったが、四年ほど前に彼女もこうして洞窟の中で、母に抱かれていたと思う。ただ、洞窟はこんなに冷たくはなく、また穴の外はずっと明るくて暑かった。そんな記憶だった。穴の入口に黒い影がさした。デヴィルは低く唸った。そしてその影がテツだと判ると、唸り声が自然に消えていった。蝦夷春蟬の声が洞窟の外の針葉樹林で起こりはじめる頃、赤ン坊たちの目が開いた。まだうすい水色の膜が被っていて、明暗が感じられる程度であったが、それでも赤ン坊たちはどうやら仔狼らしく振舞うようになった。灰色のふかふかした毛で蔽われた連中は、薄暗い穴の奥に五匹で固まって、穴の口を向いて母の帰りを待つのだった。デヴィルも、もうこの頃になると、だいぶ安心をして外出するようになり、自らの手で食糧を見出していた。それとい

うのも、テツの訪問がだんだんと遠のき始めたからで、これもどうにもならない自然の約束ごとであった。

デヴィルは仔狼の時代にビレネー山脈の麓の森林で捕えられ、それからは人間によって飼育されてきたのだから、野性で生きた食物を手に入れるということには、慣れていなかったが、彼女はあの難しい芸当を覚え込むほど利口だったし、若いライオンのネロと戦うほど敏捷であったから、大雪山の森の中でも、獲物を得る術を直ぐに学び取ってしまった。一度は失敗しても、二度とやり損うことはなかった。どんな動物でも水を飲まずにはいられないことを知って、彼女はいつも水辺に待ち伏せた。この北海道という大きな島には近い昔まで、デヴィルと同じ大きさの狼たちが棲んでいた。彼らは家畜を荒らすという理由の為に、明治になってから人間の手で絶滅させられてしまったが、それだけに、この島はデヴィルが生きてゆくにはよい条件を備えていた。蝦夷鹿は蝦夷狼のいなくなった今日では、むかしほど狼仲間に対して警戒ぶかくなっていなかったから、デヴィルは割合にたやすく旨い餌にありつけた。だから彼女はマキ親方らの人間の恩もついぞ想い出さなかった。

仔狼たちは日一日と目に見えて成長し、上になり下になりのふざけ合いをするようになり、やがて小さな、針のように鋭い牙を露わし始めた。それは乳離れの時期がきたことを示していた。デヴィルの乳房が小さな鋭い牙で傷つくようになると、彼女は仔狼たちに乳を与えなくなった。そして、その代わりに彼女が捕えてきた獲物の肉を嚙んで、吐き出して小っちゃい奴どもに与えた。仔狼たちはがつがつと喰べた。初めて喰べる旨い物に、彼らは有頂天になったが、それでもまだ母の乳房を恋しがった。デヴィルはしかし、そういった不心得者を咬んで近寄せなかった。肉体がだんだんと出来てくると、仔狼たちのふざけっこは、いよいよ激しくなって、その鋭い牙で兄妹の耳や、尾や、足に傷をつけることもしばしばだった。中でも、あの一番大きい身体の長兄は自然の法律をよく学んだので、ますます大きく強くなって、ほかの弟妹を完全に押えていた。彼の牙はまた、ほかの弟妹のそれよりもはるかに長く鋭かった。

（だから私は彼にキバという名前を贈ろうと思う。なぜなら狼の母親が、その子供たちに名前をつけるなんてことはあり得ないし、それかといって名前がないことは、今後、彼の活躍を物語ってゆく上に私にも、また読者にも多大の不便を感ずるからである）

デヴィルは子供の中でキバに特に目をつけた。彼女は威張っているキバを見ると攻撃を加えて、鼻の先で押して転がした。するとキバは怒って唇をまくりあげ、そのご自慢の白くて長い牙を剝き出しにして母親に歯向かってゆく。そしてまたつき転がされた。デヴィルのキバに対する教育が始まったのだった。賢明な彼女は子供たちのうちでキバだけが、もう立派に教育を始めてもよい時期に達している

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.